

No.01

# 魔法日記

～ある厨二病患者の日記～

syo-ko

Fra.I.T

## 日記の感想

---

この日記の持ち主は、自虐的で、病んでいる少しイタイ人みたいだと感じました。  
この人を主人公にして本を書くときは名前と性別がばれないように心がけようと思いました。  
真人間になってほしいです。  
感想をかくのは苦手ですので、これくらいしかかけません。

syo-ko

とても眠い。時計には7時15分と表示されている。

今日も学校に行かなければならない。行きたくはない。なぜなら、今日は持久走があるからだ。

ボクは、体力はそれなりにある人間だと思う。10kmくらいなら普通に走りきれる。だが、疲れることは嫌いなので、常に合法的に休みたいと考えている。

だから、昨日の26時頃に雨を降らすことができるという月の護符を作成し、念を込めてみた（生まれて初めて）。そんなことをしていたせいで、約5時間しか（いつもは約8時間）眠れなかった。

このままでは遅刻してしまうので、こうしてはいられないと思い、しかたなく布団から出て、騒音を撒き散らしている目覚まし時計を止め、洗面所に向かう。

ボクは、毎朝必ず朝食をのんびりと取るようにしている。だから、毎日遅刻ギリギリの生活を送ることになってしまっている。

寝坊していて、急がないとヤバイということを理解していながら、いつもどおりに極めてマイペースに朝食を取る。親は早くしろとうるさいが、関係ない。

結局、着替えて家を出る頃には8時5分。8時30分までに学校に着かなければならない。

自転車を発進させたが、学校まで自転車で約30分なので普通に行く間に合わない。だからボクは、自転車の周りにゲームにでてきそうな魔方陣が浮かび上がるのをイメージし、自分の時間が加速して、風を切っているのをイメージする。加速の効果音（ビュオッやゴオオッ）が口から漏れていても気にしない。小学生の視線が突き刺さっていても関係ない！そのままマッハで駆け抜ける。

奇跡的に事故ることなく学校に着いたが、8時35分。それでもマイペースに教室に向かう。

教室に入ると、まだ先生は来ていなかった。セーフ。

「〇〇、おはよう！」

級友に声をかけられたので、軽く頭をさげて応える。

基本的にボクは無口な人間だ。質問されれば、答えることくらいできるけれど、こっちから挨拶したり声をかけたりするのは苦手だ。

先生が来たので、席に着き、鞆から本を取り出して読み始める。先生は出欠を取るだけだろうし、何か大事な話があったとしても、後で級友に聞けばいいと思っているので、このホームルームは読書するための時間にしている。ちなみに、読み始めた本はラノベ。基本的にボクは、ラノベと漫画しか読めない。

ボクは、このクラスで最も無能な人間だ。だから、特殊能力を持っている本の世界の主人公に憧れ、魔術師になりたいと最近思った。実はボクはスゴイ人間だと自分で思えるようになりたいと思った。

いつの間にか、担任の先生のかわりに、数学の先生が教壇に立っていた。午前の授業が始まる。目を瞑っていれば、すぐに昼休みになるだろう。



昼休み.....それは、ボクが最も孤独を感じる時間。友達の少ないボクは、4時間目が終わった瞬間に一人自席で弁当を食べ始める。仲の良い者同士でかたまって食べている人達が理解できない。

今日の5, 6時間目は体育で、持久走がある。昨夜のおまじないは効かなかっただけ、曇ってはいるが、雨は降りそうにない。

「.....帰りたい。」

思わず独り言を漏らしてしまう。そして、誰かに聞かれてないだろうかと思い、キョロキョロと辺りを見回す。睨まれたような気がして、さりげなく弁当箱に視線を戻す。

弁当を食べ終わると、特にすることも無いから、本を開いて考え事を始める。ふいに級友に読んでいたややエロめのラノベを取り上げられ、からかわれたことを思い出す。なぜか楽しかったような気がする。アレか自分はマゾなのか？あのいじめられることによって快感を得ることができるという。...いや、それはないよね。あの時は他人にかまってもらえたのが、嬉しかっただけだよ...。本当にそうなんだろうか？...だんだんと惨めになってきたので、頑張って進路を変えて他の事を考え始める。今日の放課後は買い物にでもいこう。とか、今日の夕飯なんだろうか？とか...

そろそろ体育着に着替えようと思い、級友がワイワイやっている教室をそっと抜け出す。

「おはよう、○○」

部活のマネージャーだ。この人は会ったら必ず挨拶してくるな。と思いつつ頭をさげる。そして、その体制のまま、更衣室に向かう。

更衣室には、まだ誰もいなかった。メールはきていないだろうけど、無意味にケータイを確認する。やはり、メールはきていない。ケータイには、家族と、たぶん使うことのない級友のメールアドレスが登録されている。

隣のクラスの人（体育は2クラス合同で行われている。）が来たので、今日は体育があると再確認し、着替え始める。

着替えて、外に出ると、空は雲に覆われていて、今にも降ってきそうだった。そして、とても寒かった。雨が降らないんだったら、さっさと始めて欲しいと思った。

全員そろい、アップが始まる。憂鬱な気分準備体操とランニングを終えると、寒さはやや気にならなくなっていた。

「はやく並びなさい。」

体育教師が声を掛けたのでスタートラインにつく。

ヨーイ、ドン！の合図で走り始める。それと同時に邪気眼を開眼！一気にトップに躍り出ようとするが、道が混雑して思うように進めない。たいして使えない邪気眼である。

スタート時のペースでゴールすることができた。走っている間はきっと悲惨な顔をしていただろう。

走り終わってから雨が降ってきた。当初の予定どおりに、雨で授業を潰すことはできなかったが、なんだか、清々しい気分になれた。



部活の時間になった。この時間だけボクは明るくなれる。

そんな部活の時間も終わり、すぐに下校する。文具店に寄り道するからだ。

つい最近、魔術のことを調べ、魔法日記というものが必要だとわかった。今日から魔法日記を付けようと思ったので、文具店で、ルーズリーフを買って帰った。

家に帰り、夕食を食べ、テレビを見て、風呂に入り、そして寝る。という日常に新しい習慣ができた。

今日は魔術的なことはやっていなかったなので、今日あったことを、普通の日記みたいに書くことにする。

千里の道も一歩から。日記の最後にこう書いてありました。

眼が覚めると、もう正午近くだった。

今日から冬季休業なのだが、今日は部活もバイトもないので、とても暇な1日になる。

眠気はほぼ完璧になくなっているのに、二度寝することはできそうにない。

しかたなく起き上がり、やや遅めの朝食を取る。

その後、そろそろ自分の魔法名を決めなくてはならないことを思い出したので、パソコンを立ち上げ、Google翻訳を開く。実はもう大体決まっている。

ボクは、この世の謎を解き明かしてみたいと思っているので、その思いをそのまま魔法名にしようと思う。

魔法名は、基本的にラテン語で付けるらしいので、Google翻訳で日本語でその思いを打ち込んでラテン語に変換する。

しばらくして、しっかりとくる羅訳が見つかったので、それに決め、魔法名の誓言儀式を始める。

ラッキーなことに、家には自分一人だったのでどうどうと小五芒星追儼儀式と宣言をすることができた。しかし、発音が悪かったからだろうか？小五芒星追儼儀式を行っても、何も起きなかったように感じる。

そんな一日は、すぐに終わった。



今日は、バイト4日目。

郵便局でのバイトは、人と話すのがニガテな自分に向いていた。

バイトは、午後なので、深夜2時頃に寝て、12時頃に起きるようにしている。

まるで、働くために生きているみたいだ。まるで、大人みたいだ。

ボクは、大人にはなりたくない。生きていける自信はないし、将来したいこともない。一生遊んで暮らしたい。

ただ、金が欲しいから。良い大学を出て、たくさんの収入を得たいから。だから、ボクは、学校に通っている。

今やっているバイトは、汗水たらして働いてお金を得るといふことの、大変さと大切さを学べと、親が強制的にやらせているものだ。

給料は、修学旅行の旅費にするそう。

「旅費くらいオマエらが出してくれてもいいよな？」

とか思いながら、しぶしぶ働くことになりそうだと思っていたけど、ここの地味な作業は割と楽しい。それに、休み時間は、ケータイのストラップのタイガーアイとおしゃべりしていれば、退屈することもない。

このストラップは、夏休みに部活の合宿に行った時に350円で買ったものだが、聖別したところ、ボクの金運をかなり上昇させたようで、空だったお財布には、いつのまにか英世が2枚入っていた。

バイトが終わり、家に帰る。

今日は大晦日なので、夕飯は年越しそばだった。おばあちゃんが送ってくれた椎茸が入っていておいしかった。

家には、頑固なおやじがいるので、遅くまでテレビを見ることができなかった。

そんな残念な大晦日が、終わろうとしている。

「今年も時が矢のように過ぎていった……」

中学の部活を引退するまでの間は、本当にゆっくりと時間が流れていた。辛いこともたくさんあったけれど、楽しくて充実していた。あのころは友達がいたからかもしれない。

いつの間にか、新年を迎えていた。

「今年は親友と呼べるような友達ができるように、できれば、彼〇もできるようにしよう。」

今年の抱負も、例年どおりのくだらないものになる。

昨日のバイトでクタクタになっているが、今夜は眠らない。なぜなら、初日の出を見に行きたいからだ。

3年ほど前から、近くの10階建てのマンションの10階から初日の出を見に行くようにしている。

そこから見える風景は、とてもきれいだ。日の出の2時間くらい前からその場所で太陽が昇ってくるのを待とうと思うくらいには。

時刻は、午前3時ちょうど。ボクは、今頃になって年賀状を書き始める。年賀状頂戴メールを送ってきたのは、中学の時、部活が同じだった人だけだからだ。その人の家は、歩いて10分くらいの距離にある。なので、今から書いて直接ポストに入れに以降と思う。

何を書こうかと悩み始める。5分悩み、10分悩み、結局本を読みながら、考え始める。

そして、結論が出た。いつのまにか、4時半になっていた。

## あけおめ。ことよろ。

。を含めて、10文字で空白を埋めることにした。

汚い字で、でかでかと。まるで、小学1年生が書いたものようになる。いや、小1よりもひどいかもしれない。

受け取った人がどんな顔をするのかがとても気になってしまうようなハガキを携えて、ボクは夜の住宅街を歩き出す。

車は1台も走っておらず、とても静かだ。そして、東の空の月が異様に明るく輝いている。

「……………きれい。」

だれもいないので、ボクは恍惚の表情をさらしながら、歩いている。

「……………カメラ持ってくればよかった。」

いつもより独り言が多くなる。あとで撮ろうと思いつつ歩く。

何のイベントも発生せずに、配達は終了。

ボクはカメラを持って10階に向かう。

10階には、まだ誰もいなくて、とても静かだった。月はさっきよりも上のほうにあった。

ボクは、高所恐怖症だ。ここから夜空を見上げると本当に足がすくむ。空に落ちそうな、空が落ちてきそうな気がして、手すりにしがみつく。

日が昇り始めた。この時間になるまで、飽きっぽいボクがただ夜景や夜空を見ているだけで、2時間も待てたのがとても不思議だ。

いつのまにか隣には人が来ていた。

ボクは、さっさと写真を撮り、逃げるように家に帰った。

家に帰ったボクは、部屋に入った途端に意識を失った。

目が覚めたときには、もう夕方になっていた。とてつもなく寒かったので、ストーブに当たり

に行く。

今日から魔術訓練を本格的に始めようと思っていたので、すぐに瞑想を始める。

日記に書くことが増えるということは、割と嬉しいと、最近分かった。

ちょうど家には誰もいなかったので、瞑想に集中できると思ったが、筋肉痛でできなかった。

これらのことを日記に綴り、今日の2度目の終わりを迎える。

最悪の気分で目が覚める。

弟が喚いている。なぜ喚いているのかは不明だが、とにかく殺意が湧く。邪気眼が力を解放すると、誘ってくる。

ボクは、必死で邪気眼を押さえる。弟に手をだせば、おやじに殴られるからだ。

先に生まれてしまった者の運命。理不尽だ。

結局、力は暴走して、壁に穴を開けた。仕方がない。

親には怒気を捨てろと言われているが、ボクはこの時、怒気をコントロールできるようになりたいと思った。

怒気は、使い方さえ間違わなければ、すばらしいエネルギーになると邪気眼は言っていた。

確かに、平常時よりも、少し荒れているときのほうが勉強ははかどる。

親に殴られた後、そんなことを考えながら昼食を取る。

実は、最近ボクは神様のことについて考えることが多い。今頃になって、献金したから...。という理由で、他の家の子よりも少ないお小遣いを貰っていることに疑問を抱き始めたからだ。

「なぜ、ルシファーは墮落したの？」

今日は母にこう質問した。

「自分よりも後に生まれた人間の所為で、自分に向けられる神様の愛が減ったと思ったからよ。ルシファーはね、神様の愛を横取りした人間に嫉妬して、あんなことをしたから、地獄に落とされたの。...神様はすべてのものを等しく愛されていたのにね.....。」

母は、物知りなのかもしれないが、ボクはこういった話を信じることができない。

「神は全てのものを創ったんだよね？嫉妬という感情も神が創ったということでしょう？だとしたら、ルシファーは神の所為で墮落したことになる？」

だから、このような捻くれた質問をして、母を困らせてしまう。

「.....。」

母は、それを無視して、居眠りをはじめていた。

ボクは諦めて支度をし、バイトに向かった。

それからは、何も起こることもなく、いつもどおりに1日が終わった。

最近、何かがおかしい。

これは自慢なのだが、ボクは勉強だけはできるほうで、クラス1位の成績だったりする。

そんなボクが、なぜか、いつのまにか勉強しようという意欲が失せた。今までの復習、宿題、それと通信教育に取り組むことがどうしてもできないのだ。

燃え尽き症候群だろうか？いや、違う。勉強は、学校の授業時間と、休み時間だけでしかしていない。全く熱を入れていない。

鬱だろうか？ そうかもしれない。だが、詳しいことは分からない。

だから、ボクは今日は占い用のルーン一組を作って、今の自分の状態を、ルーンに聞いてみようと思う。

25枚一組のルーンのカードが出来上がった。裏面に模様をつけようとして失敗して、数枚のカードが、裏面識別可能になってしまったが、目を瞑って選べば問題なさそうだ。

早速1枚引いてみる。



アンスールが逆位置で出てきた。

解釈できないので、結局何も解決しない。

ただ、ここらが潮時だと思えることはできる。勉強しなくても問題ない生き方を模索しようとは思える。

ボクの一つの人生が終わり、新しい人生が始まったと感じられるような1日になった。

最近、視覚化が得意になってきたような気がする。

日記をつけていると、そういったことになんとか気がつくということを実感できた。

そういえば、今日は、ボクの誕生日だ。

誕生日だといっても、特に何もなく、夕食後にケーキがでるくらいなのだが。

いつもどおりに退屈な日になった。

12時過ぎに起き、やや遅めの朝食を取り、日課の視覚化の練習を行ったくらいしか記憶にない。

現在時刻は午後11時30分ジャスト。

ケータイ持ってるのなら、誕おめメールくらい送ってくれてもいいのと思う。

やっぱりどうでもいいか。と思いつつ日課の瞑想を始めようとしたその時だった。

ふいにケータイがメールの受信音を発した。マナーモードに設定していなかった。時間的に少々マズい。

おやじは、生活習慣とかにうるさいうえに、邪気眼が通じないHP9999の最強最悪のモンスターだ。（主にボクの自由を束縛する「小遣没収」や「携帯解約」などの攻撃が得意）

今の音はそんなボスキャラを召喚する引き金になりかねない。

ボクはとっさに身構え、戦闘に備える。

.....が、いくら待っても現れる気配がない。

不思議に思って、戸をほんの少し開けてむこうを見てみると、そこにはだれもいなかった。正確には、魔王の使い（弟）がリビング（我が家は、ウサギ小屋なので全部屋寝室）に布団を敷いて寝ていた。

風呂に行っているようだ。

ボクはほっとしてため息をつき、メールを確認する。

友人からのもので、お誕生日おめでとう。とだけ書かれていた。

それだけで、ボクは救われたような気がした。嬉しかった。鬱とか悩みとかが数秒だったけれど本当にどうでもよくなった。

どんな映画観ても泣けなかったこのボクがこんな局面で泣けた。

ボクは飢える寂しい人間だったようだ。

ケータイを持っていなかったら、誰にも祝われずに今日を終えていただろう。

このケータイは、部活で使うという名目で召喚したものだ。

その部活は今、なぜか廃部の危機に瀕している。

このケータイという名の絆は奪われるわけにはいかない。

厳しい戦いの予感がした。

結局、瞑想はできずに終わった。

ある時ボクは気づいた。

なんとなく己の魂に刻んだ名の意味を。ボクがこの世に生まれた意味を。

神がいると気づいている者はいるだろう。いないと思っている人もいるだろう。そのところは、正直どうでもいい。

ボクが許せないのは、神の意思を知っているふりをしてお金を巻き上げる連中。

ボクの親は「神様に献金するから」と言って小遣いを減らしたことがあった。当時のボクは納得していたかもしれないが、今は違う。

12歳になって漸く親はだまされていると思えた。

神の意思なんてだれにも分かるはずがない。

宗教団体を頭から否定しているわけではないが、ボクは、その教えを100%信じる気にはなれない。妄信している人が理解できない。その教えがすべて真実だと言う証拠を見せてもらった覚えはないからだ。

結局、神の意思というものは、個人で、他人に迷惑を掛けないようなものを考えてみるべきものだと思う。

きっと間違った答えしか出ないだろうけど、自分の人生を歩んでいく上では、その答えがあれば十分だと思う。少なくとも宗教がらみで損をするということはなくなるだろう。

答えはみんなバラバラになると思うから、無用な争いを避けるために出した答えは自分の胸にしまっておくべきだろう。

16歳になって正しいものと間違っているものを見分け方をたぶん学んだ。そして、本物かどうかは分からないが、力を手に入れる方法を知った。

得た力でボクはあの連中の闇を暴く。

それが、ボクの考える神の意思がボクに与えた使命だ。

誰か、僕の暴走を止めてくれ。

fin



## あとがき

---

はじめまして。syo-koと申します。漢字では「尚古」という設定です。  
初めて本を書きました。そして、自分が国語1の理由がなんとなく分かりました。  
すみません。書いたことが自分でも意味不明です。

この作品はフィクションです。現実とは一切関係ありません。